

『登別市の観光政策を考える』をテーマに開催されたフォーラムは、グループ提言で入賞したチームの代表者3人と、登別温泉旅館組合組合長や登別観光協会専務理事の5人をパネリストに、同志社大学政策学部教授をコーディネーターに行われしました。

北海道を代表する観光地のぼりべつを訪れる宿泊客は、平成11年度をピークに減少傾向にあり、今後の観光に不安を抱えている状況にあります。

フォーラムでは、この状況に対し、大熊さんが観光地登別温泉の印象を「温泉という資源があってもその周りが埋められていない」、鈴木さんは「登別らしさが伝わってこない」と問題点を提起していました。

グループ提言の中でも、「登別温泉とそれ以外の地域の人たちとの一体感が感じられない」「登別温泉だけが観光地」という発表がありました。この2つの地域の連携が今後の登別市の発展にもつながると考えられました。

登別市が観光地として生き残るためには、「市内で活動している団体などが、『観光』や『温泉』といっ



コーディネーター  
同志社大学政策学部  
教授  
真山達志さん



パネリスト  
登別温泉旅館組合  
組合長  
今井光さん

たキーワードを取り入れた活動を行うことで、観光というものを市民に定着させる必要があります」と大熊さんは提案していました。

また、登別らしさについて今井さんは、「秋田県にある玉川温泉の泉質が健康に非常に良いとされていま



す。最近、登別でも同じ泉質が確認されました。これらの温泉成分がどういうふうにいんだらうということデータをベース化し、情報発信することを考えています」と登別ブランド（＝登別らしさ）につながるとしました。



パネリスト  
社団法人登別観光協会  
専務理事  
奥村修さん



パネリスト  
同志社大学政策学部  
真山ゼミ3年生  
大熊涼介さん

「多種類の泉質を持つ温泉は登別の特徴です。温泉の泉質は生きているので変わるんですよ」と奥村さんは温泉好きな外国人が増えていく状況の中、これからは登別のPRに努めていくとしました。

また、湯浅さんからは「市民が温泉をあまり利用していないのでは」との問いに、今井さんは「市民無料入浴日の実施や宿泊半額券の配布などで、市民は利用されています」と相反する発言となりました。観光地登別の魅力を自分たちで見つけ出し、市民自らが楽しむことで、その広がりは道内、国内さらには海外へと波及することが予想されます。

そのほか、ハード面では登別温泉街の駐車スペースを確保するためのモータープールの設置や電線の地中化により、空間の演出という意見もありました。

今回のフォーラムでは、登別市の観光の問題点が、あらためて浮き彫りになりました。今後、この問題点



パネリスト  
立教大学  
コミュニティ福祉学部  
原田ゼミ3年生  
鈴木杜司さん



パネリスト  
日本工学院  
北海道専門学校  
2年生  
湯浅和浩さん

が市民を含めて議論され、登別市の観光がまちづくりにつながることが期待されました。

3日間の全国大学政策フォーラムの開催を終えて、今井さんから観光という字は「光を観ると書きます。光というのは温かみとか、エネルギーとか、元気を出す源です」とのお話をいただきました。

今年、新たな取り組みとして開催した特別イベント『鬼火が誘う地獄の谷』では、市民を含め多くの観光客から好評を得ました。

また、昨年大湯沼川に整備された天然の足湯には、連日のように市民や観光客が訪れ楽しんでいきます。人がにぎわうということは、そこには魅力があるからです。

全国大学政策フォーラムは、来年も登別市での開催が予定されています。

問い合わせ  
企画  
グループ  
☎85 1 1 2 2  
Eメールkikaku@city.no  
boribetsu.hokkaido.jp